

FORTUNE500 vs. 丸山眞男 グローバル社会の中の我々の「立ち位置」を考える

芝崎厚士*

はじめに

みなさんこんにちは、GMS 学部の芝崎です。専門は国際関係論、国際文化論、国際関係思想史です。ゼミでは、「GMS 国際関係研究入門」と題して、国際関係の歴史、国際政治学の基礎、国際社会の諸問題をゼミ生と一緒に勉強しています。そのほかに、「グローバル交流論」「グローバル市民社会論」という講義で、日本と世界の関わり、世界全体で生じているさまざまな問題について、受講生と一緒に考えることにしています。

GMS 概論では、世界政治・国際政治とメディアの関係について、1, 2年生向けの講義を行っています。昨年は、「マイケル・ムーア対ソクラテス」と題して、グアンタナモ基地をめぐる「誤報」事件を出発点として、メディア・現実・我々の重層的な間接性を考え、古代ギリシャの哲学者であるソクラテスの「弁論術」という概念と、21世紀のメディア界の寵児の一人となったマイケル・ムーアの手法とを「対決」させることで、メディアの本質とは何か、という点について考察を行いました。その記録は、本誌『Journal of Global Media Studies』の第2号に掲載されています¹⁾ので、参考にしてくだ

さい。

さて、今日の講義は、この「対決」形式の第2弾で、「FORTUNE500 vs. 丸山眞男」と題して行います。FORTUNE500とは、アメリカのビジネス誌『フォーチュン』が毎年発表している、企業の売上高ランキングのことです。正確には、FORTUNE500は、アメリカの企業だけを含むランキングで、世界全体をカバーしているランキングは、1990年から、FORTUNE Global 500という名前で発表されています。

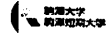
ちなみに、今年のランキングを見ると、1位がウォルマート、2位がエクソン・モービル、3位がロイヤル・ダッチ・シェル、4位がBP、5位がトヨタ、といった順番になっています²⁾。いわば、FORTUNE (Global) 500とは、世界で最も力を持っている、グローバル企業の代名詞なのです。

一方、丸山眞男ですが、みなさんのほとんどが、もうご存じないかもしれません。しかし、丸山眞男は、戦後の日本において、もっとも影響力を持った知識人の一人でしたし、かつての大学生は（どこまで分かったかは別にして）、必ず一度は読んでいたといわれるほど、若者に知的な影響を与えた存在でした。丸山は1911年に生まれ、東京帝国大学（今の東京大学）で、

* グローバル・メディア・スタディーズ学部 専任講師

¹⁾ 「マイケル・ムーア対ソクラテス『弁論術』としての21世紀のメディア」『Journal of Global Media Studies』第2号（2008年3月）。(<http://www5.plala.or.jp/shibasakia>)よりダウンロード可。

²⁾ FORTUNE Global 500 2008の詳細は、<http://money.cnn.com/magazines/fortune/global500/2008/>を参照。


駒澤大学
 グローバル・メディア・スタディーズ学部
 GMS概論
 2008年度 前期 (土・2限)
 担当 芝崎 厚士
 テーマ
FORTUNE500 vs. 丸山眞男
 グローバル企業と我々の立ち位置について

スライド1

配布物
 (1) レジュメ 2枚
 (2) 解答用紙 1枚

 ※後ろに回してください。
 ※後から来た人、一番前の列(2カ所)に同じものを置いておくので、各自取りに来ること。

 ※各自協力して配布・回収してください。

スライド2

本日のテーマ
 ・国際関係・世界政治とメディアのかかわりを、メディアウォッチで理解する
 ・「世界の見え方」が、立場によってどう異なるのか。
 ・物事が悪くなっていく時、人はどう対応しうるのか
 ・よりよい世界を作るには、どうしたらいいのか。

スライド3

後の東大総長南原繁に師事し、戦後、東京大学の教授として、そして戦後民主主義の知的リーダーの一人として、学問のみにとどまらず、安保闘争などのさまざまな現実の課題に向き合い、思想と行動の両面で活動し続け、1996年に

自己紹介
 ・専門：国際関係論、国際文化論、国際関係思想史

 ・HP：<http://www5.plala.or.jp/shibasakia/index.htm>

 ・最近関心があること：カントの平和論、ソフト・パワー論、帝国論、今日やること。

スライド4

・ **【今日の授業】**
 ・◎読んで、書いて、聴いて、見て、感じ取って、考える。
 ・◎90分でどれだけその作業に集中できるか、に挑戦する。
 ・◎B4両面が真っ黒になるくらいメモを取り、ノートをとる(色遣いなど工夫、丸写しではなく自分なりにアレンジ)。
 ・ ◎時間内に集中してやり抜く

スライド5

亡くなりました。有名な著書としては、『日本の思想』(岩波新書, 1961年)、『現代政治の思想と行動』(増補版, 未来社, 1964年)などがあり、現在は著作集や対談集、講義録などが数多く出版されています。

この、日本の戦後を代表する知識人であった丸山と、21世紀の世界を牛耳る存在とも言われているグローバル企業とを、いったいどのように関連づけることができるのでしょうか。これから、さまざまなメディアを読み解いていくことで、この「対決」をみなさんの知性と感性をフルに駆使して、考えてほしいと思います。

この授業は、①ニュースウォッチ②リーディング③メディアウォッチ④まとめ(「対決」)、という四つの柱から成り立っています。それぞれ

のパートは、小テスト形式で行います。限られた時間の中で、課された課題をどこまでこなしていくかが鍵ですので、読んで・感じて・見て・聞いて・書く、という、五感をフルに生かした能動的な取り組みが必須です。この講義は、単なる一方の「話を聞いてノートを取るだけ」ではなく、目と手を駆使し、さらに耳をすませて、種々の教材を集中して吸収し、それに対する自分の意見や感想を短時間でまとめあげる、という濃密なトレーニングの場です。気持ちをしっかり持って、ついてきてください。

最後に一つだけヒントを。今日の講義のサブタイトルは「グローバル社会の中の我々の『立ち位置』を考える」です。とくにこの「立ち位置」という言葉が、キーワードになってきます。「立ち位置 (positionality)」は、わかりやすく言えば、「立場」です。この世界の中で生きる我々の物の見方や考え方は、ある特定の「立場」によって違ってきます。特に、「この世界とは何か」「この世界と私とは、どういう関係にあるか」という根源的な問いにかかわる点は、その人の「立場」によって全く違ったように経験され、体感され、生きられていくものです。

とはいえ、「立場によって見方が違う」というだけで片付くほど、世の中は単純ではありません。むしろ、立場によって見方が違う、というのは、結論であるよりも、考察の出発点です。このことを、さまざまなメディアの報道や歴史を通して、どう考えていったらいいか、ひいては、立場という問題を我々はどうとらえ、どう生きるべきなのか、ということが、講義全体を通じたテーマです。

I セッション1 ニュースウォッチ メディアと「立場」～長野聖火リレー報道をめぐって～

では早速、ニュースウォッチから入りましょう。まず、資料①～④を見てください。これは、

長野で開催された北京オリンピックの聖火リレーに関する、ある報道機関のニュースサイトの記事です。これを見て、内容を簡単にまとめて、感想を書いてください。さらにもう一つ、作業をやってもらいます。この記事の出典、つまりどこのサイトで掲載している記事なのかを、考えてみてください。記事の内容自体が大きなヒントになっているので、そんなに難しくないと思いますので、推理してみましょう。

(6分経過)

はい、時間です。では、解説していきましょう。

まず、記事の出典ですが、これはみなさんのほとんどが、「中国のニュースサイト」である、ということに、すぐに気づいたと思います。そのとおりで、これらはすべて「チャイナネット」(<http://japanese.china.org.cn/>)というニュースサイトの記事です。チャイナネットは、中国国務院新聞弁公室の総合情報ポータルサイトで、10カ国語版をもち、中国の幅広い記事を発信しています。

まず①ですが、4月25日に行われた長野での聖火リレーが「無事」に終了したことを伝える短い記事です。写真は聖火ランナーではなく、中国の国旗を持つ応援団たちであること、「中国人留学生を含む大勢の人々」が沿道に駆けつけていたことが強調されていることがわかります。また、福原愛選手の前に「男が飛び出す混乱があったものの、男はすぐに逮捕された」のであって、混乱はあったが、あくまで「無事に終了した」という結びになっています。

次に②ですが、こちら中国の国旗がはためく写真が二葉使われており、「数千人の中国人留学生が日本各地から集まり、沿道が「歓声と

³ チャイナネット日本語版「長野聖火リレー、無事に終了」2008年4月28日 http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2008-04/28/content_15026697.htm

II セッション1 ニュースウォッチ メディアについて
 ・(1) 長野での聖火リレーをめぐる記事その1の①、②、③、④を読んで、内容を1, 2行で簡単にまとめ、感想を書きなさい。(5分)
 【重要】この記事はどこニュース・サイトのものでしょう?。

(2) この記事には「何が書いてないか」、考えなさい。(1分)

スライド6

中国の赤い国旗で沸き返っていた」と書かれています⁴。さらに③では、「中日友好」を示すようなプラカードを掲げた中国の応援団の様子を描いた3枚の写真を中心に、「5千人を超える在日華僑・華人および中国人留学生が」集まったこと、その「在日華僑・華人および中国人留学生」は、「終始落ち着いて声援を送り続けた」こと、そしてその声援は「異国の地で暮らす中国人にとって祖国、さらには五輪聖火リレーへの熱い心を代表したのみならず、日本および世界各国の人々へ、新世代の中国の若者たちが送り続けたエールを感じさせたに相違ない」と結んでいます⁵。

最後の④では、「感動を呼んだ職員のおじぎ」をやはり写真付きで紹介しています⁶。聖火リレーに「日本に住む多くの中国人が声援に駆けつけ、多くの感動を残していった」と書き出し、さらにアジア通信社社長の徐静波氏がブログに

⁴ チャイナネット日本語版「長野の聖火リレー、応援団で沸き返る」2008年4月28日 http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2008-04/28/content_15026679.htm

⁵ チャイナネット日本語版「長野聖火リレー、中日友好を願う多くの声援」2008年4月29日 http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2008-04/29/content_15034787.htm

⁶ チャイナネット日本語版「長野聖火リレー、感動を呼んだ職員のおじぎ」2008年4月29日 http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2008-04/29/content_15036357.htm

・チャイナネット(中国網)：中国政府の主導で作られたニュースサイト (<http://japanese.china.org.cn/>)
 ①無事終了：「中国人留学生を含む」+「男が飛び出す混乱」でも無事終了。
 ②応援団で沸き返る：「歓声と中国の赤い国旗」
 ③中日友好を願う声援：「5千人を超える在日華僑・華人および中国人留学生」+「終始落ち着いて」
 ④職員のおじぎ：中国人に対して、おじぎが「感動」を呼んだ
 ・ナショナリズム>>>オリンピック?：リレー開催国日本のことは?、いかに中国に忠誠を尽くし、愛国的に協力し合い「感動」しているか「無事」であったかを強調

スライド7



スライド8



スライド9

掲載した写真を掲載しています。それは「北京オリンピック組織委員会の職員が沿道の華人らに深々とおじぎをする写真が添えられ、読者の感動を呼んでいる」のであって、徐社長のブログからの引用として「長野での聖火リレーの



スライド10

日、突然大雨が降り出した。何も準備をしてこなかった中国人留学生は、雨の中でも自分の場所を動かず、祖国からの聖火の到来を待った。雨水が学生たちの髪をぬらし、上着をぬらした。北京五輪組織委員会の職員はこの風景を目にすると、窓から身を乗り出して、雨のなかに立つ在日中国人らに深々とおじぎをした。その場にいたすべての中国人が感動した」ということになっています。

この①~④の記事を見ると、長野の聖火リレーは、日本で他のメディアを通して見聞した長野の聖火リレーとは、かなり印象の異なるイベントとして、描写され、報道されていることが明白にわかると思います。これらの記事で、あくまで中心に置かれているのは、長野でも日本でもなく、聖火リレーに対して中国の人々が

・ここに書いていないこと：記事①にあった「男」は誰だったか → 【ニュースウォッチ 参考記事 参照】
 ・命を賭けてチベット問題を訴えかけた、タシィ・ツウリン氏の必死の叫び。

スライド11



スライド12

いかに熱心に集まり、応援し、感動を呼んだか、そしてリレーが無事に終わったか、ということなのです。

さて、ではここに「書いていないこと」とは何だったのか。いくつかあげることができますが、ここでは、①に出てきた「男が飛び出す混乱」の「男」が誰だったか、なぜその「男」は飛び出したのか、ということが書いていない、という点をとりあげてみましょう。

参考資料にあげたMSN産経の記事①、②をご覧ください。その男とは、台湾で古物商を営むチベット人、タシィ・ツウリンさんでした。①では、ツウリンさんが飛び出し、取り押さえられている様子を鮮明に伝える写真を載せています⁷。彼は、両親が亡命したインドで生まれたのですが、子供の頃から、父親の壮絶な体験を聴いていました。彼の父親は、1959年のチベット紛争の際に中国の公安に拘束され、死刑を宣告されたところを危機一髪で脱出、ツウリンさんの兄をつれて家族3人でヒマラヤ山脈を越えたそうです。「オリンピックに反対するつもりはなく、非暴力的な手段でチベットの惨状を訴えたかった」というのがツウリンさんの主張で

⁷ MSN産経「『フリーチベット』の叫び届かず 亡命2世泣きながら乱入 聖火リレー」2008年4月26日 <http://sankei.jp.msn.com/sports/other/080426/oth0804261339026-n1.htm>

- さまざまな立場から世界はどう映るのか
- ①民主化運動、民族独立運動による崩壊を必死で防ごうとする中国共産党政権
 - ②政府の指導のもと、「愛国心」や「忠誠心」を表明しようと「熱狂する」中国の民衆
 - ③人権抑圧を訴え、チベットの自治独立を悲願とするツッリン氏やダライ・ラマ
 - ④ツッリン氏を支援したり（罰金は寄付で賄われた）、長野や世界各地でチベットや東トルキスタンの国旗を振った、人権や自由を守ろうとする、日本人を含めた世界の人々

スライド 13

した。

つづいて②によると、威力業務妨害で逮捕された約 20 日後にツッリンさんは解放され、記者会見を行いました。改めて自分の意図を説明し、日本人からも励ましのことばを受け取ったこと、四川大地震について、「生死をさまよっている人を助けることのほうが五輪より重要だ」と思う。ただチベットに害を与えるのは中国政府であり、中国の人々には同じ人間として幸せになって欲しい」といったこと、などをコメントしています⁸。

皆さんご承知のように、北京オリンピックの聖火リレーに対しては、各地でたくさんの中国の人々が参加し応援したと同時に、人権侵害を訴え、民族自決を要求する、チベットや東トルキスタンの人々、また彼らの趣旨に賛同する市民運動や NGO などの活動家や一般市民も、それぞれの要求をアピールしようとしてさまざまな行動を起こしました。出発地点であるギリシャをはじめ、パリやロンドンでの厳戒態勢と騒動ぶり、各地で起きたルート変更や一般市民不在のリレーぶりなどが、世界中でさまざまな賛否両論を巻き起こしたのです。

⁸ MSN 産経「長野の聖火リレーで逮捕されたタシさん、釈放され会見」2008 年 5 月 17 日 <http://sankei.jp/msn.com/world/china/080517/cin0805170046000-n1.htm>

日本でも、善光寺がスタート地点となることを辞退する、ということがありました。ここではこれ以上立ち入りませんが、聖火リレーとはそもそもどのようなべきなのか、オリンピックと政治、ナショナリズムや民族問題との関係について、改めて考えさせられる大きな事件として、今後も分析、考察していかねばならないでしょう。

さて、今回のメディアウォッチで聖火リレーを取り上げたのは、「中国のメディアは偏っている」とか、「チベットの人々はかわいそうだ」ということを結論としてみなさんに押しつけたいからではありません。ここで皆さんに考えてほしいのは「立場」ということです。

この聖火リレーと、聖火リレーをめぐる報道に關与しているのは、どのような人々でしょうか。まず、(1) 中国共産党政権の中核にいる人々にとっては、この聖火リレーはどのように見えているでしょうか。やはり、彼らにとっては、北京オリンピックはどうしても成功させなければならないのですし、その先触れとして世界中を回る聖火リレーは、どうしても成功させなければならないのです。したがって、もしみなさんがこの立場であれば、他の立場から見ても偏って見えたとしても、こうした形で報道することには、おそらくほとんど躊躇がないと思われるのです。

さらに、ツッリンさんのことを「男」として以上に報道しないのには、多数の少数民族を抱え、さらに格差の問題も抱えている現在の中国が、一歩間違えれば民族独立運動や民主化運動が全国に飛び火し、政権を揺るがしかねない危険性を抱えているからではないか、という推測も可能です。これもまた、もし自分が (1) の立場であれば、このような選択肢以外は、選ぶことが困難ではないかと思うのです。

次に、(2) 中国国旗を掲げ、「愛国心」や国家に対する忠誠を表明し、熱狂的に応援している

一般の中国の人々にとっては、聖火リレーは国家の威信のかかった一大イベントであるオリンピックを応援するまたとない機会であるわけです。彼らは、かつての東京オリンピックでの日本人や、ソウルオリンピックでの韓国人がそうであったように、自国で五輪を開催できることを誇らしげに思っていることでしょう。もし、自分が (2) の立場であれば、大多数の周囲の人々がこのような形で参加していく中で、参加しなかったり、あるいはそれに対して疑問や反感を表明する言動を取ることは、きわめて難しいということに気づくことでしょう。

一方、(3) ツッリン氏をはじめとする、チベットでの人権抑圧を訴え、より完全な自治や独立を求めるチベット人たちにとっては、この聖火リレーはどのようなものであったでしょうか。2008 年 3 月に発生した大規模な暴動以降、チベット情勢は緊迫し、多数の死傷者や逮捕者が出ているという報道を、みなさんも何らかの形で目にしたと思います。こうした状況の中で、平和の祭典であるオリンピックのイベントに対して、何の抗議行動も起こさずに看過することは、少なからぬチベット人たち（および東トルキスタンなどの少数民族の人々）にとって、できない相談だったに違いありません。

みなさんも、もし自分や自分の両親が弾圧を受けて命からがら亡命してきた経験があり、祖国から遠く離れて暮らしていかざるをえない人生を生きてきたとしたら、ツッリンさんと同じ行動を取るかどうかは別にしても、彼の心情を理解できないはずはありません。

これに加えて、(4) 人権や自由を守るべく、己の信念に基いて世界中で聖火リレーで政治的アピールを行った人々、(5) こうした報道や記事さえも見聞きせず、また見聞きしたとしても何のこともわかろうとするつもりも、理解するつもりもほとんどない人々など、さまざまな立場が考えられます。

(4) の人々にとっては、今回の聖火リレーで抗議行動を起こさないことは、中国の少数民族に対する中国政府のふるまいを正当化することになってしまう、といったふうに見えることでしょう。

そして、幸か不幸か最も多いと思われるのは、(5) の人々なかもしれません。もともと新聞もテレビやネットのニュースも見ないし、もし見たとしても自分とは関係ないのでどうでもいいし、どっちでもいいし……どちらにせよどうってことはないし、どっちでもいい。なんかいろんなことがあるみたいだけれど、日本は平和だなあ、というようにやりすごしていく人々。

しかし、少なくとも大学で学ぶチャンスを得ているみなさんは、(5) にとどまっていて良いはずはありません。そこで、(6) こうした報道や記事を、とりあえず自分自身の問題としてではないような位置から見聞きし、理解しようとしている我々、という立場がでてきます。

(6) の視点を持てれば、自分はどう考えるべきか、どう行動するべきかという判断を下す前に、この事件や報道の意味を考え、理解しようとして、ある程度客観的に全体を把握する努力をすることができるでしょう。そこで、どう考え、どう判断を下すかによって、もしかすると何らかの言動を起こすかもしれませんし、あるいは何もしないかもしれないわけです。みなさんは、(5) から (6) へ、そしてよりの確な (6) を目指すべきです。性急な結論にとびつかず、またろくに考えようもしないこともやめて、(6) で、理解し考える能力をじっくり養って欲しいと思いますし、この授業はその力をつけるために行われているのです。そこから先、自分が世界の出来事とどう関わり、どういう言動をしていくか、というのは、皆さん次第ですが、その言動がどれだけ確かで正当なものとなるかは、(6) の段階での理解や姿勢、物事

との向き合い方次第だと思います。

II セッション2 リーディング 人々が物事に対して取りうる「4つの立場」について～丸山眞男「現代における人間と政治」より～

さて、(6)の段階での理解力や判断力を磨いていくために、今度はリーディングをやってみましょう。ここでのメインテーマは、「世の中が悪い方向に向かっているときに、人々はどう反応しうるか」ということとなります。

「立場」の問題を考えると、人は、「みんなそれぞれ考え方が違うのだし、関心も違うのだから、どんな立場をどう取ったって別に構わないはず」と思いがちです。確かに、自らの義務を果たし、他者の自由や人権を侵害しない限りにおいて、人は自由にものを考え、それに基づいた行動をとることができます。しかし、「立場」の問題が最も先鋭になるのは、世の中(国内社会であれ国際社会であれ)が悪い方向へ向かってしまっているときに、それを止められるか、それを良い方向に変えられるか、という局面です。この際に、人が取りうる立場にはどのような選択肢があり、またある立場と他の立場の間にはどのような関係があるのか、を考えてみよう、ということです。

そのための題材としてみなさんのお手元にあるのは、丸山眞男が1961年に発表した、「現代における人間と政治」という論文⁹の一部分です。この論文で丸山は、ヒトラー率いるナチス・ドイツが、プロバガンダと報道統制を用いつつ、徐々にドイツ国内の抵抗勢力を弾圧し、言論の自由を抑圧し、ホロコーストに代表され

⁹ 丸山眞男「現代における人間と政治」丸山眞男編『人間と政治(人間の研究IV)』有斐閣、1961年、179-208ページ(丸山『現代政治の思想と行動(増補版)』未来社、1964年、462-492ページ、『丸山眞男集』第8巻、128-156)：本論文では、『現代政治の思想と行動』版を用いた。

III セッション2 人々が取り得る立場について
「世の中が悪い方向に向かっているときに、人々はどう反応するか」：さまざまな立場のパターン
ナチス・ドイツ(第二次世界大戦の原因、史上最悪のジェノサイドであるユダヤ人絶滅政策+ロマ、精神病患者、抵抗勢力の抹殺、言論の自由の抑圧と「嘘も百万回繰り返せば真実になる」)「大きな嘘ほど人は信じ込みやすい」プロバガンダ戦略、ファシズム)が台頭していく中で、人々がどう対応したかに関する、0、①(1-1~5)、②(2-1~2)、③(3-1~2)の文章を読んで、どのような立場を説明しているか、まとめよ。(12分)

スライド14

出典：丸山眞男「現代における人間と政治」丸山眞男『現代政治の思想と行動(増補版)』未来社、1964年(初出は1961年)、462-492ページ(『丸山眞男集』にも収録)。
丸山眞男(1914-96)：戦後日本を代表する知識人、政治学者。「戦後民主主義」の理論的指導者であり、近代日本最高の知的リーダーの一人。

スライド15

るような未曾有の非道な行いをなすに至る過程において、人々がどのような対応を取り得たのか、という点を、当時のドイツ人たちに対するインタビューの記録である、マイヤー『彼らは自由だと思っていた』¹⁰に依拠しながら、論じています。

今回紹介する部分は、「0」「1」「2」「3」に分かれています¹¹。とくに、「1」「2」「3」は、人々が取り得た立場について論じていますので、それぞれがどのような立場なのか、をまとめてみま

¹⁰ ミルトン・マイヤー、田中 浩、金井和子訳『彼らは自由だと思っていた元ナチス党員十人の思想と行動』未来社、1963年(Milton Mayer, *with a new foreword by the author, They Thought They Were Free: The Germans 1933-45*, The University of Chicago Press, 1955, 66)。

¹¹ 丸山前掲論文、469-472ページ、475-476ページ、476-478ページ。

・0：ナチスの権力統制(グライヒシャルトゥング)のすさまじさ→熱狂者+一般国民は？知っていたはずの出来事も多い。→「とめどない順応」
①・①マイヤー「彼等は自由だと思っていた」より
1-1：小さな措置の連鎖、いつのまにか事態が変化→「最初から離れて(外側から)見て」いないとわからない
1-2：「ほんのちよっと悪くなっただけ」に見える
1-3：抵抗を訴えたと「おどかし屋(alarmist)」扱い
1-4：ショッキングな事件が来ないまま、悪化。
1-5：気がつくとき世界の「精神」は完全に変化し、憎悪と恐怖の世界に。「誰も彼もが変っていく場合には誰も変ってはいないのです」

スライド16

しょう。では、始めてください。

(12分経過)

はい、時間です。では、解説していきましょう。

まず、「0」の部分で丸山は、「グライヒシャルトゥング(Gleichschaltung)」と呼ばれるナチスの権力統制下に置かれた人々は、実際にどのようなことが行われたかを全部は知らないにしても、実際に目撃したり、報道を通して知っていたことも多かったはずなのに、彼らは「黙ってすごした」のであって、ナチ化していく世界の変化に対して「とめどなく順応した」と述べています。

「1」から「3」では、その順応のパターンを、マイヤーのインタビューに答えた人々の証言を出発点に、次々と説明していきます。

まず「1」では、ある言語学者による、次の五つの証言が引用されています。ここでの引用は、すべて、第13章「しかしそれは遅すぎた」からです。なお、丸山は、若干途中を飛ばして引用しています。その部分を訳語で補うことで、理解をより深めながら、五つの証言を並べてみましょう。

(1-1) 一つ一つの措置はきわめて小さく、きわめてうまく説明され、「時折遺憾」の意が

表明されるという次第で、全体の過程を最初から離れて見ていないかぎりには、一こうしたすべての“小さな”措置が原理的に何を意味するということを理解しないかぎりには、一人々が見ているものは、ちょうど農夫が自分の畝で作物がのびて行くのを見ているのと同じなのです。ある日気がついてみると作物は頭より高くなっているのです¹²。

物事が悪い方向に進んでいく際には、一気に変わるのではなく「小さな措置」が連続していく。そのため、その中にいるときにはかえって「灯台もと暗し」となって気がつかない。しか

¹² 同上、469-470ページ。以下、丸山の引用における傍点は丸山、翻訳における傍点は訳者がイタリック体を傍点で表記したものであり、両者は一致していない。後に刊行された翻訳では、「このプロセスのなかには、それに気づくことは絶対にできません—どうか私の話を信じてください。気がつくためには、高度の政治意識、政治的な鋭敏さをもつ必要がありますが、私たちの大半は、それを伸ばす機会がなかったのです。それぞれのステップはあまりに小さく、とるにたらず、ときには『遺憾の意』も表されましたから、はじめからプロセス全体を離れてみていなければ、また、事態全体が大体どんなものなのか、『愛国的なドイツ人』がだれ一人憤慨できないこうしたすべての『小さな措置』が、将来何をもたらすかを理解していなければ、一日一日と事態が進展しているのがわからなかった。それはちょうど、農夫に自分の畑のとうもろこしが成長しているのがわからないのと同じです。そのうち、そのとうもろこしは彼の背丈よりも大きくなります」(田中、金井訳、前掲書、166ページ下段~167ページ上段)となっている。同箇所の原文は、“To live in this process is absolutely not to be able to notice it—please try to believe me—unless one has a much greater degree of political awareness, acuity, than most of us had ever had occasion to develop. Each step was so small, so inconsequential, so well explained or, on occasion, ‘regretted,’ that, unless one were detached from the whole process from the beginning, unless one understood what the whole thing was in principle, what all these ‘little measures’ that no ‘patriotic German’ could resent must some day lead to, one no more saw it developing from day to day than a farmer in his field sees the corn growing. One day it is over his head” (Mayer, *op. cit.*, p. 168) となっている。

し、気がついたときにはすでに、取り返しがつかなくなっている、というわけです。

このあと、(1-2)までの箇所を丸山は割愛していますが、実は、(2-1, 2)で引用している箇所に該当する、次のような記述が、本文では存在します。

平凡な人たちのなかにおいて、教育程度は高くても平凡な人たちのなかにおいて、どうすればこれがさけられるでしょう。率直に申し上げ、私にはわかりませんでした。いまだってわかりません。すべてが起こってしまっただけから、『発端に抵抗せよ』と『終末を考慮せよ』というあの有名な一対の格言を私は何度も考えてきました。でも、発端に抵抗するためには、それが発端だとわかるためには、終末が見越せなければならぬのです。はっきりと、しかも確実に終末が見越せなければならぬのです。だとすれば、平凡な人たちに、いや非凡な人たちにだって、どうしてそれが見越せるのでしょうか。事態がそれほどまで進展しないうちに、事態は変わったかもしれない。実際は変わらなかったけれど、変わったかもしれない。だれもがこのかもしれないに期待します。

もとナチ党員のあなたの友人の『庶民たち』は、原則的には、反ナチではなかった。私のような人間は、よく承知していた（というのもおこがましいことですが）というよりも、よく感じていたから余計、彼らより罪が重い。ニーメラー牧師は、（御自分についてはあまりにも謙虚に）何千何万という私のような人間を代弁して、こう語られました。ナチ党が共産党を攻撃したとき、私は自分が多少不安だったが、共産主義者でなかったから何もしなかった。ついでナチ党は社会主義者を攻撃した。私は前よりも不安だったが、社会主義者ではなかったから何もしなかった。つ

いで学校が、新聞が、ユダヤ人等々が攻撃された。私はずっと不安だったが、まだ何もしなかった。ナチ党はついに教会を攻撃した。私は牧師だったから行動した——しかし、それは遅すぎた、と¹³。

この直後から、(1-2)の証言が続きます。

(1-2) どうか私を信じてください。これは本当の話なのです。何処に向って、どうして動いていくのか見きわめられないのです。一つ一つの措置、一つ一つの事件はたしかにその前の行為や事件よりも悪くなっている。しかしそれはほんのちょっと悪くなっただけなのです。そこで次の機会を待つと言うことになる。何か大きなショッキングな出来事がおこるだろう。そうしたら、他の人々も自分と一緒に何とかなして抵抗するだろうというわけです¹⁴。

こども、(1-1)との関連で、わかりやすいと思います。決定的な事件が起きないかぎり、小さな措置が連続しているだけであるかぎり、人は事態を静観してしまい、結果として事態の悪

¹³ マイヤー、前掲書、167ページ上段から下段。

¹⁴ 丸山前掲論文、470ページ。後の翻訳では「ご存じのように、事態がどこに行きつくのか、あるいはどう動いてゆくのか、正確にはわかりません。正直なところ、それが真相です。行為や事件は、どれもその前の行為や事件より悪化しますが、しかし、ほんのすこし悪化するにすぎません。あなたはつぎの機会を待ち、つぎのつぎの機会を待ちます。ショッキングな事件が起きたら、他の人たちも自分と一緒に何とかなして、ともかくも抵抗には参加するだろうと考えて、大事件を待ちます。」(167ページ下段～168ページ上段) 同箇所の原文は、“one doesn't see exactly where or how to move. Believe me, this is true. Each act, each occasion, is worse than the last, but only a little worse. You wait for the next and the next. You wait for one great shocking occasion, thinking that others, when such a shock comes, will join with you in resisting somehow.” (p. 169) となっている。

化を止めることができなくなる、というのです。現在の問題で言えば、いじめ、差別や地球温暖化問題などにも、この指摘はあてはまると思います。

丸山は飛ばしていますが、マイヤー本では、このすぐ後には、

一人では行動したくない、意見もいいたくない、『わざわざ騒ぎを起こす』のはごめんだと考えるのです。なぜかといえば、そういうことに慣れてはいないからです。しかも、そうさせずにおくのは恐怖、孤立の恐怖だけではありません。真の確信がないからでもあります。確信がないというのは、きわめて重要な要素です。時間の経過とともに、この気持ちには小さくなるどころか、どんどん大きくなります。町でも一般社会でも、外の世界では『だれもかれも』くたくたがありません。抗議はきこえてこないし、抗議が目にとまるわけでもない。フランスやイタリアでは、壁や扉に反政府のスローガンがあったでしょう。でもドイツでは、多分大都市以外のところでは、そんなこともありませんでした¹⁵。

という箇所があり、さらに、(1-3)へと続きます。いかかでしょう、こうした箇所を読むと、ナチスのような権力の台頭といった大きな事態だけではなく、みなさんの身近に起きている「よくないこと」に対して、みなさんはこういう気持ちを多かれ少なかれ味わったことがあるのではないのでしょうか。人間が、自分が正しいと思うこと、正すべきことに対してなかなか立ち上がれなくなってしまう状況、というふうな考えをみると、こうした経験は決して、他人事とはいえないのではないのでしょうか。

この箇所では、ほんとうに事態が悪くなって

¹⁵ マイヤー、前掲書、168ページ上段。

いて、ここで立ち上がらないといけないのだ、という確信が持てないことが、「立ち上がったときに孤立する」恐怖以上に、人の行動を止めてしまう、という点に注目しておきたいと思えます。

(1-3) 戸外へ出ても、街でも、人々の集まりでもみんな幸福そうに見える。何の抗議もきこえないし、何も見えない。……大学で、おそらく自分と同じような感じをもっていると思われる同僚たちに内々に話してみます。ところが彼らは何というでしょう。“それほどひどい世の中じゃないよ”あるいは“君はおどかし屋だ”というんです。そうです。たしかにおどかし屋なんです。何故って、これこれのことは必ずやこれこれの結果を招来するといったって、証明することは出来ないんです。なるほどこれらはものはじまりです。けれども終りが分らないのに、どうして確実に知っているといえますか¹⁶。

次に何が起こるかを確実に証明できない限

¹⁶ 丸山、前掲論文、470頁。後年の訳書の該当箇所は、1-2の直後、改行して次のようになっている。「大学社会という自分自身の社会のなかで、自分の同僚に個人的に話してみます。同じ考えを抱いている人もなかにはいるからです。でも、彼らは何というのでしょうか。『そんなにひどくはないさ』、『きみは夢をみているんだよ』、『人騒がせなやつだな』といいます。あなたは人騒がせなやつです。これは必ずこれにはできません。事実はどういうふうに始まるのです。でも、当人に終末がわからなければ、どうして確信できますか、推論すらできないでしょう。」(168ページ上段～下段)。
In the university community, in your own community, you speak privately to your colleagues, some of whom certainly feel as you do; but what do they say? They say, 'It's not so bad' or 'You're seeing things' or 'You're an alarmist. And you are an alarmist. You are saying that this must lead to this, and you can't prove it. These are the beginnings, yes; but how do you know for sure when you don't know the end, and how do you know, or even surmise, the end?' (p. 169).

り、「おどかし屋」扱いされてしまう、という点は、まさにナチスの台頭に限らない問題であったでしょう。一般的に考えてみれば、確かに、未来を予測することはできても、確実にそれが起こることを証明することはきわめて困難です。近年の地震の予測を思い出してみてもそうですし、より深刻な事件でいえば、オウム真理教のサリンテロや9.11を考えてみても、同様のことはいえるのではないのでしょうか。なお、ここから(1-4)の間には、次のような指摘がありますので、これも、補っておきましょう。

あなたは、一方ではあなたの敵、法律、体制、党からおどしをかけられ、他方では、自分の同僚から悲観的だ、神経質だとあしらわれる。まわりには、あなたの近い友人がのこります。もちろん、いつもあなたとおなじように考えてきた人びとです。

でも、友人は前より少なくなります。だんだんいなくなったり、仕事に沈滞したりする者がでてきます。会合や集会で会う人たちは、もう前ほど多くはありません。気のおけないグループは小さくなります。小組織への出席は減り、小組織そのものが縮小します。いまでは、いちばん古い友人たちの小さな集まりのなかでも、あなたは自分が独り言をいっていると感じ、自分が現実から孤立していると感じるのです。こうしたことは、あなたの確信をますます弱め、あなたをますます動けなくします。一どう動くのか。何かしようとするれば、そのきっかけをつくらなければならない、そのときあなたはまぎれもないトラブルメーカーになる——その間にそれがますますはっきりしてきます。そこで、あなたは待つこととなります¹⁷。

¹⁷ マイヤー、前掲書、168ページ下段から169ページ上段。

この箇所でもまた、確信のなさ、と、孤立が負の相乗効果を引き起こし、何かしらを感じていても、ますます動けなくなっていくという悪循環が説得的に描かれています。このあと、(1-4)が続きます。

(1-4) けれども、何十人、何百人、何千人という人が自分と一緒に立ち上がるというようなショッキングな事件は決して来ない。まさにそこが難点なんです。もしナチ全体の体制の最後の最悪の行為が、一番はじめの、一番小さな行為のすぐあとに続いたとしたらば——そうだ、そのときそは何百万という人が我慢のならぬほどショックを受けたにちがいない。33年に、ユダヤ人以外の店先に『ドイツの商店』という掲示がはられた直後に、43年のユダヤ人にたいするガス殺人が続いたとしたらば……。しかしもちろん、事態はこんなふうな起こり方はしないのです¹⁸。

このあと、(1-5)の前までは、下記のような証言が続いていますので、これも補ってみましょう。

そのあいだに何百もの小さな段階があります。なかにはそれと感じられないものもあります。そしてどの段階も、つぎの段階でショックを受けないような準備をしているのです。第三段階は第二段階よりそんなに悪く

¹⁸ 丸山、前掲論文、470ページ。訳書の該当箇所は、「ところが、何十人、何百人、何千人の人たちが、あなたと一緒に行動するというショッキングな大事件は絶対に起きません。それが問題です。最初の一行為のすぐ後で体制全体の最終的な最悪の行動が起きていれば——『ドイツ人の店』というステッカーが、非ユダヤ人経営の店にはられた直後に、43年のユダヤ人のガス室殺人がおこなわれていれば——何千人、何百万の人たちは大きなショックを受けたでしょう。でも、現実はもちろん、そうではありませんでした」(169ページ上段)。

ないのです。あなたが第二段階で抵抗しなければ、なぜ第三段階で抵抗しなければならないのでしょうか。こうして、事態は第四段階に進みます。

そしてある日、おそまきながら自分の原理に気がつくと、あなたはそれらの原理によってうちのめされるのです。自己欺瞞はすでに大きすぎる重荷になっています。それはささいな事件をきっかけに、私の場合は赤児同然の私の息子が『ユダヤ人の豚野郎』といったことでしたが、突然音をたててくずれ、すべてが変貌したことに、目の前で完全に変貌してしまったことに、あなたは気づくのです¹⁹。

ここを読むことで、さらに丸山の意図が明確に了解できると思います。無数の小段階の連続とした進行の中で、「なにかがおかしい」と思いながらも行動に出るきっかけを失っていく人々。確かに、そこで立ち上がるのは一種の「賭け」でしかなく、それはどの時代のどの人にとっても同様なのでしょう。しかし立ち上がったときには、いわば預言者のごとく、孤立や無視や反撥を引き受けざるをえないという帰結が、少なくとも当座は待っているものなのです。

何かが変わりつつあるが、その意味がわからない。それが悪い方向に世の中を変えていっている、という予感や予測ができて、それが納得のいくように証明ができないうざり、自分にも確信が持たず、周りの良識ある人々でさえも「待つ」選択肢をとってしまう。しかし、その結果ずると次の「小段階」へと突き進んでいき、それが積もり積もって、取り返しのつかない決定的な状況（この言語学者の場合だと、息子がユダヤ人を差別する言葉を平気で口にするようになってしまったという瞬間）まで、その

¹⁹ マイヤー、前掲書、169ページ下段。

決定的な変化に気づかない、というのです。

さきほど、この丸山の議論はグライヒシャルトングのような巨大な権力機構の問題だけでなく、もっと身近な日常レベルでみなさんが多かれ少なかれ経験していることにも通じる、と指摘しました。ここで子供の話が出てきましたが、たとえば子育て、クラブをサークルの先輩・後輩の関係、あるいは先生自身で考えれば学生の指導、という点にも、ここでの例は教訓を与えてくれると思うのです。

さて、その直後から、(1-5)になります。

(1-5) 気がついてみると、自分の住んでいる世界は、一自分の国と自分の国民は一かつて自分が生まれた世界とは似ても似つかぬものとなっている。いろいろな形はそっくりそのままあるんです。家々も、店も、仕事も、食事の時間も、訪問客も、音楽会も、映画も、休日も……。けれども、精神はすっかり変わっている。にもかかわらず精神をかたちと同視する誤りを生涯ずっと続けてきているから、それは気付かない。いま自分の住んでいるのは憎悪と恐怖の世界だ。しかも憎悪し恐怖する国民は、自分では憎悪し恐怖していることさえ知らないのです。誰も彼もが変わっていく場合には誰も変わっていないのです²⁰。

²⁰ 丸山、前掲論文、470頁。訳書では、「あなたが今住んでいる世界、あなたの国やあなたの国民は、あなたが生まれた世界とはまったくちがっているのに、それは外形にならなにかわりがあるわけではなく、すべてがそっくりそのまま、安心感を与えてくれる外形をたもっているのです。家も、店も、仕事も、食事の時間も、来客も、音楽会も、映画も、休日も、なにかわりはありません。でも、精神はかわってしまいました。これまであなたは、外形を清新と同一視する過ちを犯してきましたから、精神には気づかなかったのです。いまあなたは、憎悪と恐怖の世界に住んでいます。憎悪し恐怖する人びとは、それさえ自分では気がつきません。みんながかわれば、かわらない人間はひとりもいないこととなります」(169ページ下段から170ページ上段)。

「誰も彼も変わっていく場合には誰も変わっていないのです (when everyone is transformed, no one is transformed)」という最後の言葉が、この (1-1) から (1-5) を一言で要約しており、決定的な結論となっていると思います。内心では体制に疑問を持ちながら、「順応」していった人びとの心理は、このようなプロセスだったのです。

つづいて (2-1) と (2-2) では、すでに紹介したように、最初は言語学者たちと同じように何もせずに、段階が深まっていくのを見ていたが、自分が攻撃される番になって、立ち上がったという、ニーメラーのケースです。

(2-2) ナチが共産主義者を襲ったとき、自分はやや不安になった。けれども結局自分は共産主義者でなかったので何もしなかった。それからナチは社会主義者を攻撃した。自分の不安はやや増大した。けれども依然として自分は社会主義者ではなかった。そこでやはり何もしなかった。それから学校が、新聞が、ユダヤ人が、というふうに次々と攻撃の手が加わり、そのたびに自分の不安は増したが、なお何事も行わなかった。さてそれからナチは教会を攻撃した。そうして自分はまさに教会の人間であった。そこで自分は何かをした、しかし、そのときにはすでに手遅れであった²¹。

これはまさに (1-2) で言われ、先ほど述べたような、「段階の無限進行」を拳手傍観する姿勢を描いていると同時に、人はいつ抵抗するか、という点を説明しています。つまり、ナチスドイツの経験では、人は、自分が直接的な攻撃を受けないかぎり、たいていの場合は黙って何もしないが、自分の身が危うくなるとはじめて、

- ②ニーメラー：順応者（内側）から抵抗者（外側）へ
- 2-1：ナチの攻撃が及ぶ範囲が拡大しつづけるが、自分が攻撃されるまではなにもせず。自分の番になって抵抗した時には、もはや手遅れ。cf.後期高齢者医療制度問題
- 2-2：苦い教訓：「端初に抵抗せよ」＋「結末を考えよ」
- 「はじめから外側」にいない限り抵抗は異常に困難。しかし、はじめから外側にある人々は、いかに抵抗しうるのか。

スライド 17

立ち上がる。しかし、自分の身が危うくなつてからは、すでに手遅れになってしまっていた、ということになります。

そこから、(2-2) で丸山がまとめているように、「端緒に抵抗せよ (Principiis obsta)」(物事の始まりや、わずかな兆しの時点で抵抗しないと間に合わない)、「結末を考えよ (Finem respice)」(ほんのわずかな出来事であっても、その先に、その終末に何が待っているかを考えなければならない)、という原則が導き出されるのです。しかし、丸山が述べているとおり、大多数の、順応する人々にとって、この二つの原則に忠実に生きることは、きわめて難しいのです。これは、現在のグローバル社会を生きる我々にとっても、同様に、きわめて困難だと思います。

なお、「端緒に抵抗せよ」、「結末を考えよ」は、裏返せば、支配者、権力者の側の鉄則なのです。つまり、「端緒」の時点でいかに一般庶民に抵抗させないか、また、さまざまな娯楽を与えたり日々の仕事や生活を忙がしくさせることで、いかに「結果」を考えさせないようにするかが、「グライヒェンツツング」の成否を決める死活的なポイントなのです。

今まで何度か出てきたように、こうしたことが見通せて、行動できるのは、はじめから内側にいる人々ではなく、はじめから外側に身を置

いている人々のほうである、という指摘があります。では、外側の人々にはどう見えているのか、またその人々の気づきや声は、内側にどのように響きうるのか、という点を考えてみる必要があります。

この点に関しては、丸山は「3」で、次のように述べています。はじめから外側に置かれている「同じ世界の中の異端者」にとっては、同じ世界は「いたるところ憎悪と恐怖に満ち、猜疑と不信の嵐がふきすさぶ荒涼とした世界」であって、例の「小さな措置」は、「巨大な波紋となってひろがり、ひとりひとりの全神経はある出来事、ある見聞、ある噂によって、そのたびに電流のような衝撃を受ける」ことになり

ます。日々の生活は緊張と不安のたえない連続であり、隣人はいつなるとき密告者になり、友人は告発者となり、同志は裏切り者に転ずるかも計り難い。ぎらつくような真昼の光の中で一寸先の視界も見失われるかと思えば、その反面どのような密室の壁を通してでも不気味に光る目が自分の行動を、いや微細な心の動きまでも監視しているかのようである。これが自主的であると、他動的にであるとを問わず、自らを権力から狙われる立場においた人々に多少とも共通するイメージであり、そして、ナチス・ドイツについて私たちに常識化しているのはむしろこのほうのイメージに近い²²。

丸山は、(たとえばツッリンさんのような)被害者や抵抗者の「真実のイメージ」とはまさにこのような外側に置かれた人々のイメージであり、「はじめからの正統の世界」と「はじめからの異端の世界」との間の断絶は、権力による異

- ③3-1：同じ世界の中の異端者：迫害の直接目標、憎悪と恐怖、猜疑と不信、措置＝巨大な波紋、緊張と不安の絶え間ない連続。
- 3-2：二つの「真実」のイメージ：同調者と追従者cf.体制の被害者の観察3-3&3-4：両者のコミュニケーションは困難
- 4つの立場
- <1>内側の熱狂的同調者 ex.ナチ親衛隊
- <2>内側の消極的追従者 (大多数の国民)
- <3>内側から外側に追放 ex.ニーメラー
- <4>はじめから外側の異端者ex.ユダヤ人etc.

スライド 18

端の封じ込めと内側の人間の境界からの移動によって、決定的なものになっていく、と分析しています。このようにして、「立場」の違いによって、全く異なるイメージが形成されていく、というわけです。

ここで、丸山がメイヤーを通して描き出したさまざまな真実のイメージをもたらず立場を、4つに整理しておきましょう。

- ①内側におり、熱狂的に同調する、正統の世界の人々
- ②内側にいるが、消極的に追従する、正統の世界の人々
- ③内側にいたが、ある時点で外側に追放され、正統から異端となった人々
- ④はじめから外側におかれた異端者

おおよそ、物事がある方向に進んでいくときには、この4つの立場のどれかに、人々はおかれることになります。メイヤーの例であれば、①はナチスの中枢にいる人々や、親衛隊などナチの尖兵となって働いた人々であり、②は例の言語学者のように、内心不信感を抱きながらも、「確信」を持たず、「おどかし屋」とみなされるのを恐れ、ついていった人々であり、③はニーメラーのように、自分が攻撃されて初めて抵抗した人々であり、④はユダヤ人をはじめ、当初からナチス・ドイツの標的となった人々、ということになるわけです。

²¹ 丸山、前掲論文、475-476ページ。

²² 同上、476-477ページ。

この4つの立場は、現在の我々が世界の問題、日本の問題など、さまざまなことを考えるときにも、自分が取りうる立場、とっている立場、あるいはとるべき立場は何か、ということをも自分なりに理解する上で、また他者がどういう立場をとっているかを理解する上で、あてはめて考えてみることで、有益な考え方だと思います²³。

たとえばファッションや流行といった身近な問題でもいいですし、選挙や歴史認識の問題といった国家のあり方に関わる問題でもいいですし、貧困や格差などのグローバルな問題でもよいでしょう。自分自身、あるいは国家や政府といったさまざまな主体が、ある問題に対してどのような立場を取っているのか、それはなぜかを、みなさんで考えてみて下さい。

III メディアウォッチ 『ザ・コーポレーション』にみる、グローバルな権力としてのグローバル企業

さて、これまではナチス・ドイツという、国家権力と我々の関係に即して、4つの立場というものを考えてきました。ここで、今度はメディアウォッチを通して、21世紀の現在において、グローバルな問題を考える際に、この4つの立場をどのようにとらえたらよいか、を考察していきましょう。

題材として取り上げるのは、2004年に発表された映画『ザ・コーポレーション』です²⁴。監督はマーク・アクバーとジュニファー・アボッ

²³ ちなみに、文化大革命の頃、中国の民衆の間では、「真ん中に位置せよ」という言葉が語られたという。つまり、運動に熱狂して同調していれば、その運動が終わったときに粛清される。かといって運動に反撥しては、その運動によって粛清される。したがって、ここでいう②の立場になり、先頭に立たずかといって③や④とならないようにするのが最善である、というような選択が望ましい、という意味だったようである。

²⁴ 映画公式サイト <http://www.uplink.co.jp/corporation/>

I セッション3 メディアウォッチ では現在がグローバル企業の権力
これから、映画『ザ・コーポレーション』(2004年、マーク・アクバー、ジュニファー・アボット監督)の一部を見てもらいます。(18分) **メモをとりながらしっかり見ましょう。**
この映像は、(1)ボリビア、コチャバンパでの「水戦争」、(2)ファシズム、ホロコーストと企業、(3)グローバル企業(代表的なのはいわゆるFORTUNE500にランクインしている企業)、政府を圧倒、(4)国際会議とデモ、(5)市場と株主の支配、(6)企業の社会的責任と民主主義に分かれています。
これを見て、丸山眞男のいう4つの立場、を念頭に置いて、思ったこと、感じたこと、考えたことを自由に書きなさい。(3分)

スライド 19

- (1) 2025 2/3が水のアクセスを失う：コチャバンパ：世界銀行、援助と引き替えに水道業の民営化、ベクトルの横暴+政府の支援、民衆の抵抗、死傷者(→勝利!)
- (2) ナチス・ドイツと企業の癒着、労働運動の弾圧、ファンタ、ホロコーストとIBM
- (3) 政府、企業への統制力喪失。企業が政府の経営に参加

スライド 20

ト、2時間30分近い大作ですが²⁵、今回はそのうち後半部分のあるセッションをもとに、考えてみましょう。では、メモをとりながら、「4つの立場」を念頭に置いて、思ったこと、感じたこと、考えたことを自由に書いてください。

では、解説に移りましょう。まず、最初に出てきたのは、ボリビア第三の都市であるコチャバンパで、世界銀行の融資を受けるために、水道の民営化が決定された、というエピソードです。政府は、アメリカの水道会社であるベクトル社に経営を任せ、貧しい人びとに雨水を集めることを禁止し、さらに収入の4分の1を水道代として徴収するという決定を下しました。これに対して、コチャバンパの人々は立ち上が

²⁵ 原作本は、ジョエル・ベイカン、酒井泰介訳『ザ・コーポレーション』早川書房、2004年。

- (4) 通商会議：激しい反対運動の中、それを無視して美辞麗句を語り、利益を求め、会議を行う人々：デモを見て「私は内側にいて、彼らは外側の人々だ・・・まずいことになった」
- (5) 株主と市場という圧力：企業は株主に忠誠を尽くそうとする
- (6) 信頼回復の努力：企業の社会的責任(CSR)→やらないよりはよい、見せかけだけか?自発的な方策のため(利益を得るため、パンビにでもゴジラにでもなる)、決めるのは本来、企業ではなく、国(そして国民)。

スライド 21

り、デモ行進を行うなどして政府と対立、多くの死傷者が出た、という話です。

続いて、政府が一般庶民の生活を犠牲にして企業の利益を優先する例として、ナチス・ドイツと企業の密接な関係があったことを、コココーラの代用品として開発されたという、ファンタ・オレンジの話や、IBMのパンチ・カードとホロコーストの関係などの事例を通して描き出していきます²⁶。さらに、近年では、独裁政権などとも平気で取引を行う企業もあること、などを取り上げています。これらの例は、企業が利益や事故の生き残りを優先して、国家権力にいわば妥協していく、という事例として、この映画では紹介しているのです。

しかし、今ではむしろ力関係は逆転している、というのがこの映画の見解です。グローバル化が進展したことによって、**国家が企業を統制したり、企業が国家にすり寄りする必要はなく、むしろ企業が国家の運営に関与していく**、という状況になっている、とこの映画は主張します。

では、グローバリゼーションの進展による、政府とグローバル企業の関係に対して、声を上げる人々はいないのでしょうか。実際には、

²⁶ エドウィン・ブラック、小川京子訳、宇京頼三監修『IBMとホロコースト ナチスと手を組んだ大企業』柏書房、2001年。

1999年のシアトルでのWTO関係会議が象徴するように、自由化・民営化の進展に対して、NGOなどさまざまな活動家たちが、会場を取り囲み、デモを行い、シュプレヒコールをあげて抗議を行い、ときには警官隊と衝突する、ということが、頻繁に起きています。今年7月の洞爺湖サミットでも、こうした抗議は行われました。

映画では、米州サミットでの会議を取り囲む人々の姿が映し出されます。彼らは、“Bow Your Heads: The Corporations Will Now Lead Us to Prayer,” “Everything in the Store is for Sale” などといったプラカードを持ち、バーコードを模したマスクをつけたりしています。そして、注目すべき発言がその後に続きます。その様子を会議場である高層ビルの窓から見ていた、カナダ、ビジネス評議会のロバート・キーズは、「私は内側にいて、彼らは外側の人たちだ(I'm in inside and this is all outside—that's the way it is.)」というのです。

もちろん、アクバーたちの意図は明快で、グローバル企業の力が強大になりすぎ、それが大きな害悪を社会にもたらしているのであり、それを変えなければならない、というのが彼らの主張です。そして、その主張に沿ったような演出が、映画の随所に見られます。その主張だけを見ていては、グローバル企業の活動を的確にとらえきれた、とはいえない部分もあると思います。とはいえ、それとは逆に、企業の自己宣伝や自己PRだけを見ていれば、この映画が告発しているような、さまざまな事実を目を向けようとする機会は失われてしまうことでしょう。そう、ここにも「立場」の問題が出てくるのです。

さて、「4つの立場」で考えてみたときに、これらの映像はどう分析できるでしょう。最初のコチャバンパの事例は、基本的には、内側におかれていたはずの人々が、ある日、水道の民営

化に伴う理不尽な負担や活動の規制が開始されたことによって、外側に置かれるようになってしまった、という、③のケースだということができそうです。ただし、こうして立ち上がった人々はおもとして、一日2ドル程度の低収入で暮らす貧しい人々がほとんどです。その意味では、コチャパンバ人々はそもそも、④の立場であり、すでに、無限の小段階の進行を止めることができない状態にあり、さらなる「小さな措置」によってさらに追い込まれた結果、堪忍袋の緒が切れて立ち上がった、という解釈も妥当だと思います。

次に続く一連の事例は、権力の集中と統制の強化、という丸山の分析に、さらに利益の集中と収奪の強化、という経済的な「グライヒシャルトゥング」が踵を並べて進行しているのが、21世紀の世界である、というふうな帰結を引き出すことができそうです。さらに、政治による経済のコントロールが経済による政治のコントロールへと逆転しつつある、という構造の変化によって、経済的なグライヒシャルトゥングに基づく政治的なグライヒシャルトゥングの進行、という方向へと、世界が変化しつつある可能性を示しているといえるでしょう。

そして、ロバート・キーズが思わず漏らした「私は内側だが、彼らは外側だ」という言葉はまさに、あの4つの立場の問題を象徴的に示しています。そこには、「内側にさえいれば、多少の不満があっても、あの言語学者のように順応していけば、そんなにひどいことは起きないだろう、という「自分さえよければ、他の立場の人はどうでもよい」という感覚があると思います。

かといって、ではキーズ氏が、美辞麗句であふれたあの会議場で、「抗議をしている人々の声を取り入れるべきだ、そうしないとんでもないことになる」と言ったとすれば、間違いなく、「おどかし屋」扱いされることでしょう。下

IV セッション4 FORTUNE500 VS 丸山眞男
次の(1)～(3)について、セッション1からセッション3でやったことをもとにして、自分の考えを書きなさい。(6分)

(1) 「メディアを通して世界の出来事を知る」ということには、どのようなことに注意し、どのようなことを意識しなければならないか。「立場」という点から考えなさい。

(2) 世界をよりよい方向に変えるためには、今の自分自身に①できないことはなにか、②できることはなにか、③将来の自分にできることは何か、④そのためには今、何をしたらよいか。

スライド 22

手をすれば、そうした言動を起こしたことで、自分が外側に追いやられるかもしれない、という危険を冒すことになるわけです。それくらい、内側で疑問を持っていても何もできない状況に陥ると、外側と手を結ぶのは難しいのです。まさに、丸山のいうような「正統への集中」と「異端への集中」という二極分解と、両者の分断はグローバルな規模で進展しているのです。

IV FORTUNE500 vs. 丸山眞男

では最後に、以上のことをとおして、次の点について、みなさんなりの考えを書いてみてください。

(1) 「メディアを通して世界の出来事を知る」ということには、どのようなことに注意し、どのようなことを意識しなければならないか。「立場」という点から考えなさい。

(2) 世界をよりよい方向に変えるためには、今の自分自身に①できないことはなにか、②できることはなにか、③将来の自分にできることは何か、④そのためには今、何をしたらよいか。

はい、時間です。では、解説していきましょう。

みなさんのコメントをみると、実にいろんな意見が出てきました。グローバル企業のあり方に横暴さを感じた人もいれば、「私は自分が内

側にさえいればいいと思っていたが、内側と外側の間に立つべきだと思った」という人もいました。

先生のほうから言いうることとして、第一には、世界と自分の関わりを考える、というときに、「自分から見てそれがどう見えるか」ということだけを考えていてはだめである、ということがあります。もちろん、自分の視点、というのはとても大事です。その前提として、新聞記事であろうと、論文であろうと、音楽や映像であろうと、そこから読み取り、理解し、見て、聴いて、感じ取り、わからないことは調べ、家族や友達や先生と議論し、「自分なりの意見」をまとめる、という力を身につけることは、死活的に大事です。しかし、「自分から見た視点」というだけでは、それは「オレ様ルール」を押しつける、「自己中」、独りよがりになってしまいますし、物事を一面からしか見れなくなってしまいます。

大事なことは、上記の四つの立場をよく踏まえることです。聖火リレーの例でわかるとおり、ある一つの出来事であっても、それに対する関わり方によって、全く異なった出来事として、理解され、経験されますし、それに対する行動も、全く違ったことになっていくのです。そもそも、「自分なりの意見」というのは、自分以外の他者が同じことについてどう考えているかを全く無視したものであれば、それは「自分なりの意見」ではなく、無知や偏見に基づいた独りよがりなわがままでしかありません。

もし、「自分なりの意見」を本当に持ちたければ、ある問題や出来事に対して、他の人がどのように見ているか、感じているか、考えているかができるかぎり知る必要があります。その上で、さまざまな立場の人がさまざまに考えていることを十二分に理解した上で、そうした他者の考えを踏まえた上で、自分がどう考えるかを明らかにする、という条件を満たして初めて、

本当の意味での「自分の意見」が生まれてくるのです。

したがって、自分の意見を持つためには、ある出来事に関して、たとえば賛成派・反対派の双方がどう見ているか、支配者の視点・民衆の視点からはどう見えているか、男性・女性の視点から、豊かな人・貧しい人、先進国・途上国などなど……さまざまな視点を自分の中に持ち、それらをいったん受け入れ、それぞれの立場からの世界の見え方をそれぞれの立場に立って理解することが、必須の条件となるのです。

第二に、これは丸山眞男の結論でもあるのですが、こうしたことを学ぶ機会を持っている我々は、単に「内側」にさえいればいいのではないし、「外側」から「内側」を攻撃し、告発し続けられればいいというでもなく、内側と外側の境界線に立って、両方の論理や意識、心理を考え、双方を橋渡ししていくべきである、ということです。このことを丸山は、次のように言っています。

境界に住むことの意味は、内側の住人と「実感」を頒ち合いながら、しかも普段に「外」との交通を保ち、内側のイメージの自己累積による固定化をたえず積極的につきくずすことにある。中心部と辺境地域の問題の現代的な普遍性を強調することは、思想や信条にたいする無差別的な懐疑論のすすめではけっしてない。もし懐疑というならば、それは現代における政治的判断を、当面する事柄にたいする私たちの日々の新たな選択と決断の問題とするかわりに、イデオロギーの「大義名分」や自我の「常識」にあらかじめ一括してゆだねるような権柄な思考にたいする懐疑である。もし信条というならば、それは「あらゆる体制、あらゆる組織は辺境から中心部への、反対通信によるフィードバックがなければ腐敗する」という信条である。そう

して私たちの住む世界が質的にも規模としても単一でなく多層的である以上、こうした懐疑と信条はさまざまなレベルで適用されるし、適用されねばならない²⁷。

丸山はこの仕事を、「[知性]をもってそれ[内側を通じて内側を越える]展望をめざすことに奉仕すること」にほかならない、と考えています。というのも、「知性の機能とは、つまるところ他者をあくまで他者としながら、しかも他者をその他在において理解することをおいてはありえないから」です。

現実には、この世界には無数の境界線があるだけでなく、一人の人間の中にも無数の境界線が飛び交っています。それらの境界線の間を見極めていくことはとても難しいことですが、意識的にであれ無意識的にであれ、実は、人間はそれらの境界線を念頭に置いて、自分が何の「内側」なのか、何の「外側」なのかを敏感に感じ取りながら、起きてから寝るまで、自分が周りでどういう位置にあるか、どういうふうに見られているか、どういうふうな言動をするか、どういうふうな受け取られてしまうか、を鋭く意識しているものなのです。そして、つい自分「内側」にいようとしていたり、そう思わせようとしていたり、なんとかして「外側」に見られたいようにしたい、と思いがちなのです。

そうした自分自身、そして自分と同じように境界線の網の目を生きている人々のあり方、そうした境界線で構成されている大小さまざまな集団や社会のあり方を見きわめていくことが、何よりも大切なのです。

最後に、丸山の指摘からさらに進んで、第三のこをつけくわえたいと思います。それは、境界線を生きる生き方が最終的に何をめざすか、ということです。もちろん、マイノリ

ティに対する人権抑圧やジェノサイドなどの事例を思い起こせばわかるように、「外側」に置かれている人々を「内側」と共存できるようにしたり、また、民族紛争がそうであるように、お互いを「外側」に置こうとしている人びとを和解させ共生の道を見いだそうとすることは、とても大切です。しかし、ただ単に「外側」の論理を全面に受け入れることで解決しようとすれば、それは「外側」と「内側」が裏返っただけになってしまうでしょう。

そもそも、「外側」と「内側」の問題を完全に解決することが可能かどうか、また必要かどうか、という点に関しては、たとえば宗教間や民族間対立、そしてカシミール問題やパレスチナ問題、あるいは北方領土などの領土問題のように、どちらかに排他的に帰属したり、従属したりすることを最終的な解決策としてとらえがちな問題などを考えてみれば、それがきわめて困難であることがわかるでしょう。

もしかすると、「外側」と「内側」を新たな「内側」の中で共存させることで、従来の「内側」と「外側」の対立を相対化するしかないのかもしれない。しかし、EU憲法の批准の問題や、NAFTAやASEANなどの地域統合が示すように、新たな「内側」を作ってもその中の対立が相対化しきれないかどうかはわかりませんし、EUとトルコの関係が象徴するように、新たな「内側」はその外に常に新たな「外側」を伴ってしまいかねない、のです。

極端な話ですが、もし地球全体が一つの世界政府のもとで統合されても、こんどは地球外の存在(宇宙人とは言いませんが、たとえばほかの惑星や人工衛星に人間が住むようになれば、そうした人々でもよいでしょう)と地球、という、新たな「内側」と「外側」ができるかもしれません。

それはさておき、あくまで理想主義的な考え方もかもしれないのですが、ともかく、境界線に

立ってさまざまな立場の人々の感じ方や考え方を理解し、双方を橋渡しすることの究極的な目標は、「4つの立場」すべての人々にとっての最善、あるいは4つに限らず、この世に存在する、多様な立場から世界を見、世界に関わっているすべての人々にとっての最善を目指すことでなければならない、というのが先生の考えです。これは簡単なことではありませんが、やはり学問をしたり勉強をしたりすることの終局的な目標は、「すべての人々にとっての最善を構想し、実現すること」でなければならないと考えます。

おわりに

以上、2008年の長野聖火リレーをめぐる報道、1961年の丸山眞男の論文「現代における人間と政治」、2004年の映画『ザ・コーポレーション』をとおり、世界と自分の関わり、さまざまなメディアを通じた自分の世界の見方と「4つの立場」の問題、政府権力に加えて経済的「グライヒシャルトツング」的状況が進展する中でグローバル企業のあり方、について考えました。

みなさんは今回の経験を通して、どのようなことを感じ、考えたでしょう。ここで見聞きし、考え、書いたことを出発点にして、自分の世界の見方はどうあるべきか、自分と世界の関わり方はどうあるべきか、ということ、これからさまざまなメディアや講義やゼミを通して、意識して生活して行ってほしいと思います。

最後に、余談めいたことをお話ししましょう。それは、「丸山眞男とメディアウォッチ」とでも表現できるようなことです。

実は、みなさんがいろいろな映像や音楽をもとに、「世界と自分の関わり」に対するイメージをつかんでいくように、丸山眞男もまた、この「現代における人間と政治」を、映像を通して着想しているのです。

●参考資料 去年の講義を、GMS学部の紀要、Journal of Global Media Studiesに載せておきました(「マイケル・ムーア対ソクラテス」)。参考にしてください。授業支援システム、先生のHPから入手できます。

スライド 23

- (1) ある一つの出来事を、できる限り多種多様な立場から見て、理解することを意識し、そうした力を付ける: 「自分から見てどうか」ということだけではダメ。賛成派・反対派、支配者・民衆、男性・女性、お金持ち・貧しい人、こども・高齢者、などなど。
- (2) 境界線に立つ生き方。「内側」と「外側」、両方の論理や意識、心理を考え、感じ取り、行動する。そして、「内側」「外側」すべての人にとっての最善を目指す!

スライド 24

VII 課題(授業支援システムで確認)
丸山眞男「現代における人間と政治」を、チャップリンの映画『独裁者』(1940年)および『モダン・タイムス』(1936年、こちらがサイレント映画一見たことありますか?)の分析から始めて、両方とも、映画史上最高の、そして最高の作品としてあまりに有名な、傑作中の傑作です。丸山もまた、映像を見て、感じ、考えたことから着想を得ているのです。
そこで、①授業支援システムに載せてある「課題」を読み、②丸山が「課題」の中で扱っている映画『独裁者』または『モダン・タイムス』(できれば両方)を見て、今日扱ったことをもとにして、現在の世界、日本、自分自身の生活や意識に関してどういったインプリケーションがあるか、自分なりに分析してください。(好きか嫌いか、ではなく、その作品の特徴、性質、作者の意図と受け手の受け止め方の関係、社会的意味などを考え、感想も書く)
枚数: A4で1、2枚程度、800-1200字(あい目安(長くて可))
提出方法: 授業支援システムを使って提出。
締め切り: 6月7日(土) 23:59

スライド 25

「現代における人間と政治」は、次のように始まっています。

チャップリンの映画『独裁者』のなかで、「What time is it?」というセリフが出てくる

²⁷ 丸山、前掲論文、491ページ。

場面が二度あった。最初はシュルツという負傷した士官が砲兵のチャップリンに助けられて飛行機で脱出する途中でこうたずねる。このとき飛行機は逆さに飛んでいるのだが、二人とも雲海の中においてそのことがわからない。チャップリンが懐中から時計を出すと忽ち、時計は鎖からニョッキリと目の前に響え立って彼をおどろかす。二度目は、ゲッター（ユダヤ人街）で乱暴をはたらいた揚句、アンナにフライパンでのされた突撃隊員の一人が意識をとりもどして立ち上がり、更っ先という言葉がやはりこれである²⁸。

ここから丸山は、『独裁者』、そして『モダン・タイムズ』、『ゴールド・ラッシュ』などをふりかえりつつ、チャップリンは、「現代」とは「逆さの時代」、すなわち「常態と顛倒した出来事があちこちに見られるとか、人々の認識や評価が時折狂いだすとか」というような個別的な事象をこえて、人間と社会の関係そのものが根本的に倒錯している時代、その意味で倒錯が社会関係の中にならば構造化されているような時代²⁹であるという主張を行っているのではないか、と分析してみせるのです。

こうした「逆さの時代」においては、人々は自由な選択を奪われているばかりか、「いまや商品の購買から指導者の選出まで、『自由な選択』それ事態が宣伝と広告によって演出される³⁰」であり、「価値の生産」ではなく「価値の演出」である「プロデュース」に、人々は動員されている。そして決定的なのは、「逆さの世界」においては、人々は自分が「逆さの世界」に住んでいる、という意識を持たないことである。そのため「倒錯した世界に知性と感性を封じ込められ、逆さのイメージが日常化した人間

にとっては、正常なイメージがかえって倒錯と映る。ここでは非常識が常識として通用し、正気は反対に狂気として扱われる³¹」ことになっていく。こうした分析から、丸山は講義で扱った「グライヒシャルトゥング」を論じていくことになるのです。

もちろん、丸山眞男は映画だけを見て、イメージだけでものを語っているわけではありません。戦前の東京帝国大学で研究に従事していた、世間的に見れば超エリートとしての該博な知識や知的研鑽がその根底にあるからこそ、チャップリンの映画からこうした作品を説き起こしていくという手法が可能であったのです。とはいえ、今の我々もまた、数多くのメディアを通して、この世界に対するイメージ、「世界の見方、考え方」を形作っていると思いますし、古今の映画やドキュメンタリーなどに容易にアクセスできる環境は、丸山の時代の比ではありません。我々もまた、そうしたイメージから、学問をつくっていくことができるのです。

最近の学生は、携帯やネット等で情報を集め、やりとりしている割には、本を読まなくなったとよく言われます。しかしその一方で、さまざまなメディアにアクセスできるという点では、過去と比べればアドバンテージであると考えることもできます。丸山のような古典をしっかり読んでいくことも大切ですが、現在のようなメディア環境を有効に活用し、そうしたメディア体験を通して自分自身の中に、あるいはさまざまな他者の中で形成されている世界の見方やそれぞれの立場を理解し、解釈し、分析していく仕事は、我々の世代にゆだねられているのです。今回の授業が、そうした仕事のヒントに若干でもなることができれば、望外の喜びです。

あとがき

この講義ノートは、2008年5月24日に行った、「グローバル・メディア・スタディーズ概論」での講義をもとに、加除訂正を施したものです。GMS学部の講義の一端として、参考にいただければ幸いです。なお、本講義はあくまで本学部で行われている多様な講義の一例であることをお断りしておきます。

GMSの学生の皆さん、GMS学部での勉強を考えている高校生、受験生、大学生、社会人の皆さんの、何らかの参考や示唆になるところがあれば、うれしく思います。至らない点も多々あるかと思いますが、皆さんからのご指導ご叱正を賜れば幸いです。

参考文献

- チャイナネット日本語版「長野聖火リレー、無事に終了」2008年4月28日 http://japanesc.china.org.cn/jp/txt/2008-04/28/content_15026697.htm
- チャイナネット日本語版「長野の聖火リレー、応援団で沸き返る」2008年4月28日 http://japanesc.china.org.cn/jp/txt/2008-04/28/content_15026679.htm
- チャイナネット日本語版「長野聖火リレー、中日友好を願う多くの声援」2008年4月29日 http://japanesc.china.org.cn/jp/txt/2008-04/29/content_15034787.htm
- チャイナネット日本語版「長野聖火リレー、感動を呼んだ職員のおじぎ」2008年4月29日 http://japanesc.china.org.cn/jp/txt/2008-04/29/content_15036357.htm
- MSN産経「フリーベット」の叫び届かず 亡命2世泣きながら乱入聖火リレー」2008年4月26日

- <http://sankei.jp.msn.com/sports/other/080426/oth0804261339026-n1.htm>
- MSN産経「長野の聖火リレーで逮捕されたクシさん、釈放され会見」<http://sankei.jp.msn.com/world/china/080517/chn0805170046000-n1.htm>
- 丸山眞男「現代における人間と政治」丸山眞男編『人間と政治（人間の研究IV）』有斐閣、1961年、179-208ページ（丸山『現代政治の思想と行動（増補版）』未來社、1964年、462-492ページ、『丸山眞男集』第8巻）：本論文では、『現代政治の思想と行動』版を用いた。
- ミルトン・マイヤー、田中 浩、金井和子訳『彼らは自由だと思っていた 元ナチ党員十人の思想と行動』未來社、1963年（Milton Mayer, *with a new foreword by the author, They Thought They Were Free: The Germans 1933-45*, The University of Chicago Press, 1955, 66).
- カール・シュミット、長尾龍一訳『獄中記 故ヴィルヘルム・アールマン博士を追憶して』長尾龍一編『カール・シュミット著作集1 1936-70』慈学社出版、2007年。
- イニャツィオ・シローネ、齋藤ゆかり訳『葡萄酒とパン』白水社、2000年。
- 映画『独裁者』（チャールズ・チャップリン監督、1940年、アメリカ）。
- 映画『モダン・タイムズ』（チャールズ・チャップリン監督、1936年、アメリカ）。
- 映画『ザ・コーポレーション』（マーク・アクバー、ジェニファー・アボット監督、2004年）。
- ジョエル・ベイカン、酒井泰介訳『ザ・コーポレーション』早川書房、2004年。
- エドウィン・ブラック、小川京子訳、宇京頼三監修『IBMとホロコースト ナチスと手を組んだ大企業』柏書房、2001年。
- 中村靖彦『ウォーター・ビジネス』岩波新書、2004年。
- ヴァンダナ・シヴァ、神尾賢二『ウォーター・ウォーズ』緑風出版、2003年。
- マルク・ド・ヴィリエール、鈴木主税、佐々木ナンシー、秀岡尚子訳『ウォーター 世界水戦争』共同通信社、2002年。

²⁸ 丸山、前掲論文、462ページ。

²⁹ 同上、463ページ。

³⁰ 同上、464ページ。

³¹ 同上、464ページ。